

利用児者の成長に向けたエンパワメントプロセス

鈴木七夏海 鈴木春香 本間理恵 吉村美柚

1. はじめに

私たちは、社会福祉援助技術現場実習(以下、実習とする)を行なった。その体験をグループで話し合い、私たちには利用児者が自分の強みを自分で理解し、課題解決に前向きに取り組むためのエンパワメントの視点が足りなかったという共通の課題が見つかった。そこで私たちは、ソーシャルワーカーがエンパワメントのための技術を活用することで、利用児者の成長につながるのではないかと考えた。そのため、利用児者の成長に向けたエンパワメントプロセスを展開していくソーシャルワーカーの視点について明らかにしていきたい。

2. 方法

- ①実習での個々の体験を話し合う
- ②個々の体験から共通点を見つけ、研究のテーマを決める
- ③テーマに関連する文献や論文を探す
- ④文献や論文と実習の体験とを照らし合わせ、考察を深める
- ⑤資料を作成する
- ⑥教員に助言をもらい、再検討する
- ⑦報告会で研究発表を行う

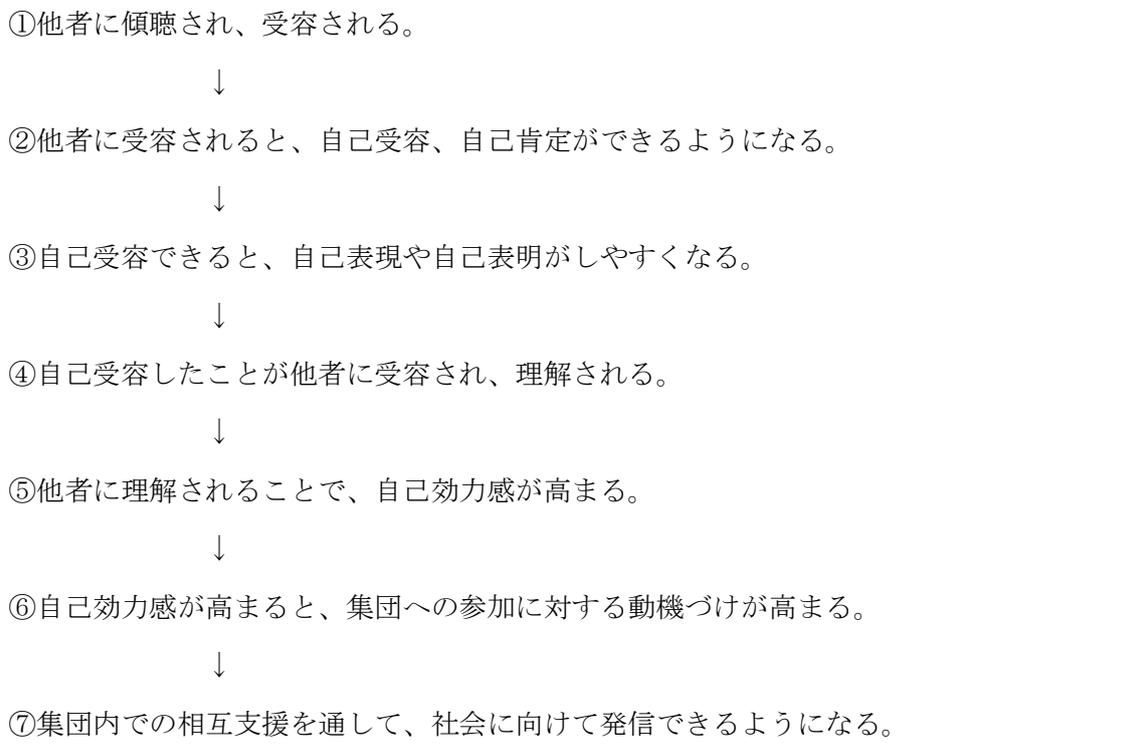
3. 先行研究

(1) エンパワメント

人々が直面する問題をものともせず行動を起こすことができるように自身を認めるようになる変化の過程である。エンパワメント実践は、利用者とソーシャルワーカーがともに問題解決への「目標を目指したシステム関係の時系列的な変容」を効果的に引き出そうとする過程で展開される。

引用文献：西梅幸治『ソーシャルワークにおけるエンパワメント実践展開研究の意義』福祉社会研究第4・5号p.59、61 2004年

(2) エンパワメントプロセス



引用文献：植戸貴子『エンパワメント志向の社会福祉実践～利用者－ワーカー関係のあり方についての一考察』社会福祉士第9号、社会福祉法人日本社会福祉士会、2002年、p.62～p.63

(3) エンパワメントのための5つの技法

- ①クライアントの問題定義を受け容れる
- ②持っているストレングスを明確にし、それらを拠り所とする
- ③クライアントの状況における力の分析を行う
- ④特定のスキルを教える
- ⑤資源を動員し、クライアントのアドボカシーを行う

引用文献：植戸貴子『エンパワメントの概念整理とエンパワメント実践のための具体的指針に関する一考察』社会福祉士第10号、社会福祉法人日本社会福祉士会、2003年、p. 61～p. 66

(4) 協働

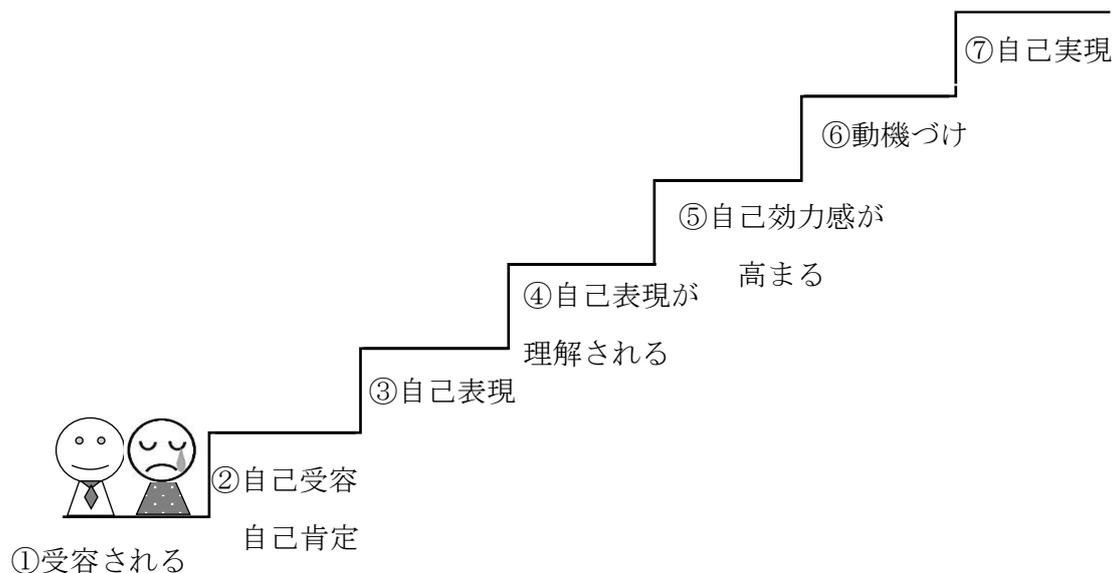
利用者とソーシャルワーカーが変化を促すために相互に資源を提供し合うことで可能となる概念。利用者が自らの経験について専門的知識をもたらし、ソーシャルワーカーが専門的介入のプロセスについて専門的知識をもたらすことで両者の知識を平等に認め、相互に活かしあうことで成り立つと考えられる。

引用文献：西梅幸治『ソーシャルワークにおけるエンパワーメント実践展開研究の意義』福祉社会研究第4・5号p. 61 2004年

4. 先行研究の考察

私たちは、エンパワメントのプロセスを展開するためには、ソーシャルワーカーが3. (3) エンパワメントのための5つの技法を活用することが必要だと考えた。さらに、ソーシャルワーカーがエンパワメントの技法を活用することで、利用児者とソーシャルワーカーの間に協働関係が生まれ、エンパワメントプロセスの段階を進んでいくと考えた。そこで、3. (2) エンパワメントプロセスを、“利用児者のためのエンパワメントプロセス”と理解し、〔図1〕を作成した。また、3. (3) エンパワメントのための5つの技法を元に、チェックリスト〔ソーシャルワーカーの技術〕を作成した。

〔図1〕 利用児者のためのエンパワメントプロセス



チェックリスト〔ソーシャルワーカーの技術〕

- | | |
|---|---------------------------------------|
| <input type="checkbox"/> .利用児者をありのまま受け入れる | <input type="checkbox"/> . スtrenグスの活用 |
| <input type="checkbox"/> . スtrenグスの分析 | <input type="checkbox"/> . 社会資源の活用 |

5. 仮事例検討

【設定】

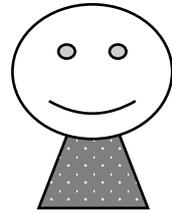
○救護施設

利用者Aさん（以下、Aさんとする）

・女性。33歳。精神障害者保健福祉手帳3級

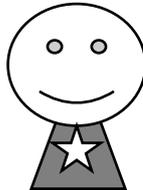
〈救護施設入所までの経緯〉

幼少期から両親に虐待を受けていた影響でうつ病を発症した。20代前半で結婚し、アパートで共働きしながら生活をしてきた。娘が生まれてすぐに夫が交通事故で死別したが、その後も仕事は続けていた。しかし、次第にうつ病が悪化していった。娘が小学校に入学後、Aさんは仕事に行けなくなり、娘も学校を休みがちになった。心配した娘の担任が、自宅を訪問した。家の中は雑然としており、娘が十分に養育されていないことがわかったため、担任は児童相談所に通報した。その後、娘は児童養護施設に入所した。Aさんは健康状態が悪化していたため、入院することになった。Aさんの状態から、今後一人で生活することは困難だと判断されたため、生活保護を申請し、救護施設に入所することになった。



利用者Bさん（以下、Bさんとする）

- ・女性
- ・救護施設の入所者のひとり。
- ・Aさんと同じ作業に参加。



利用者Cさん（以下、Cさんとする）

- ・女性
- ・救護施設の入所者のひとり
- ・Aさんと同じ作業に参加



ソーシャルワーカー

（以下、SWrとする）

- ・男性
- ・Aさんの担当。



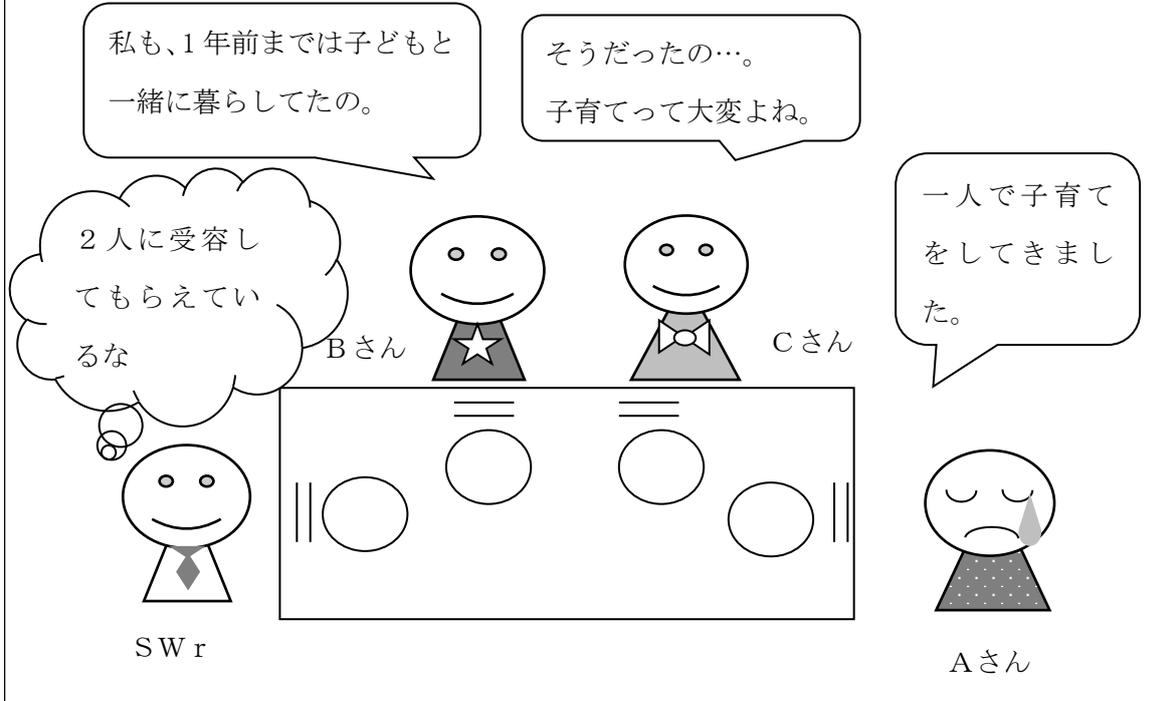
施設長

- ・男性
- ・救護施設の施設長

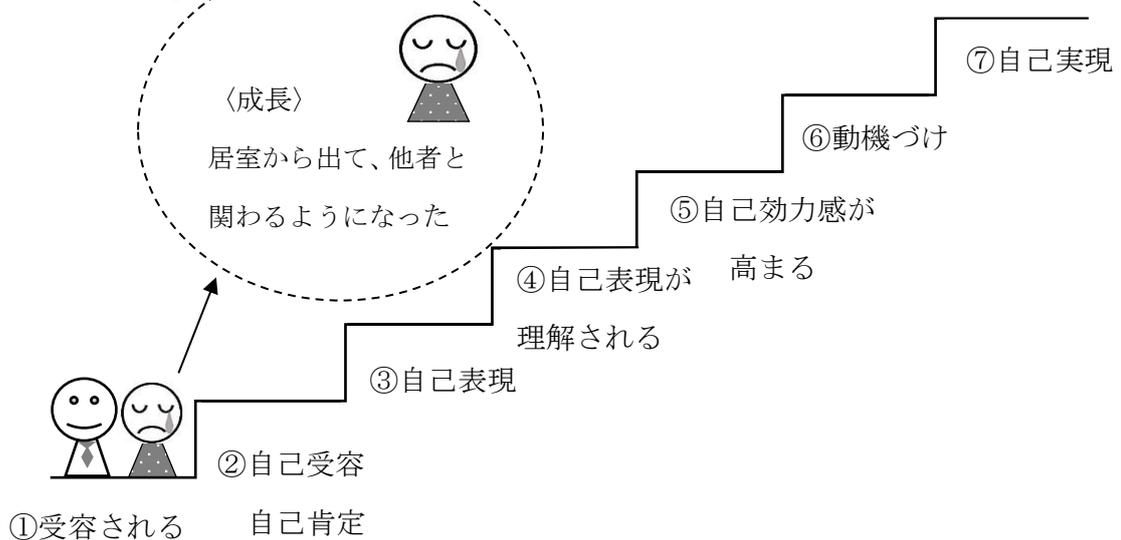


【場面1】①受容される

入所したてのAさんが1人居室で泣いている様子を見た介護職員は、そのことをSWrに報告した。そしてSWrはAさんと同じように子育てをしてきたBさん、Cさんと一緒に食事してみてもどうかと提案した。



【場面1の考察】

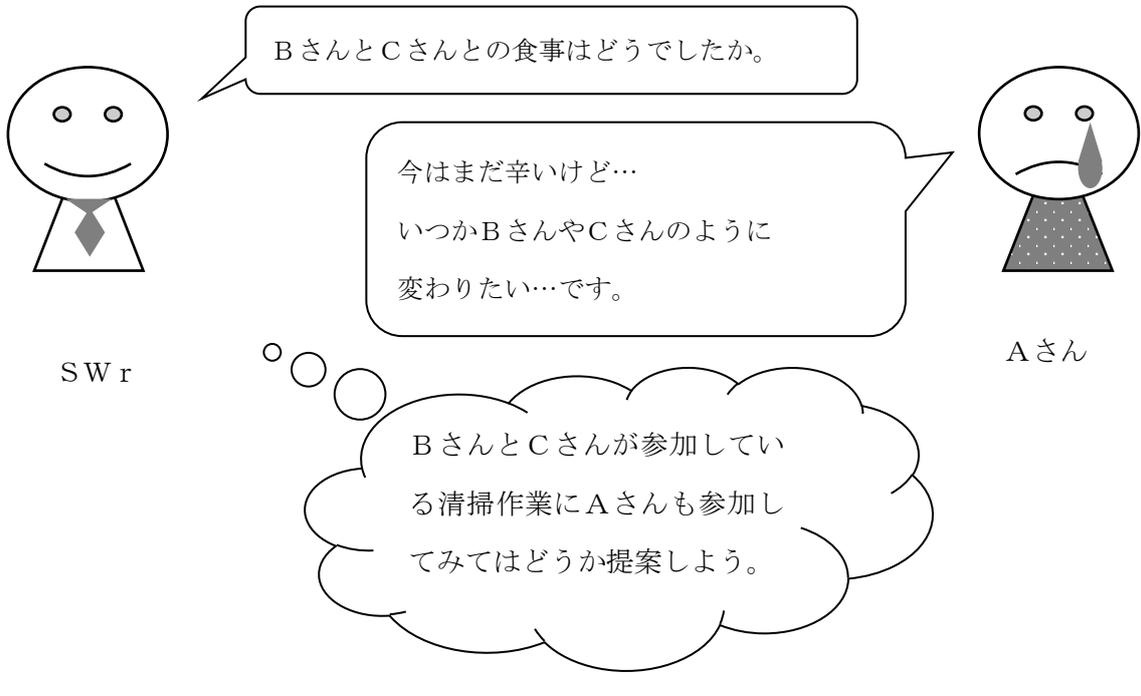


チェックリスト〈SWrの技法〉

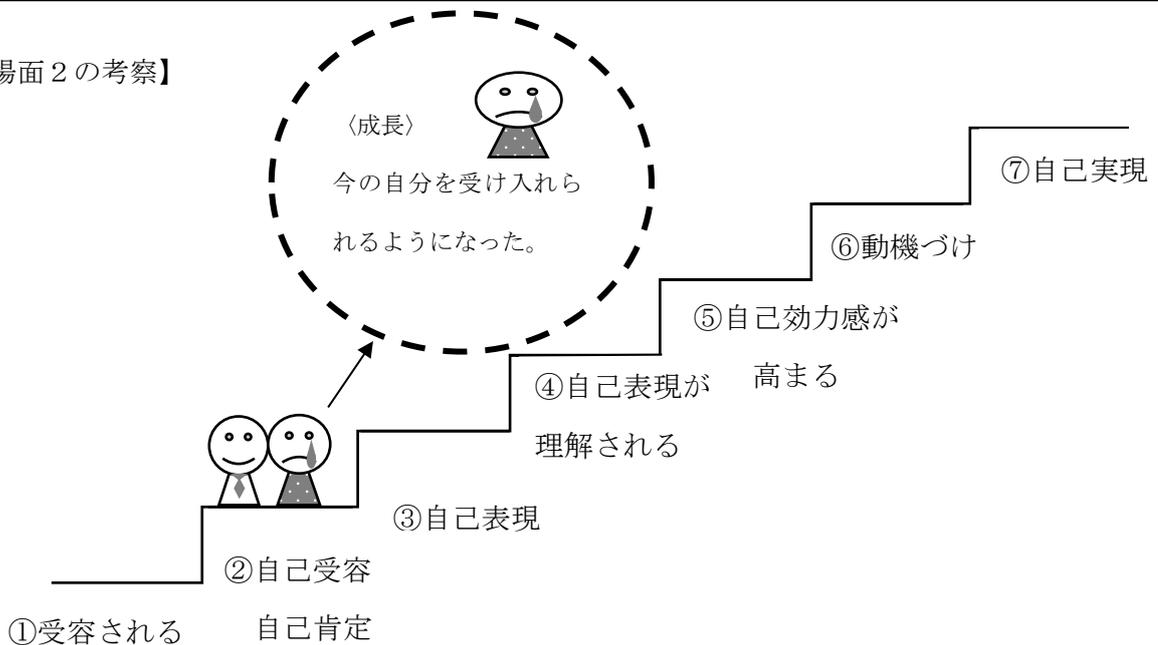
- . 利用児者をありのまま受け入れる
- . ストレングスの活用
- . ストレングスの分析
- . 社会資源の活用

【場面2】②自己受容・自己肯定

食事後、SWrはAさんの居室に行き、BさんとCさんと初めて話したことについて聴いた。



【場面2の考察】

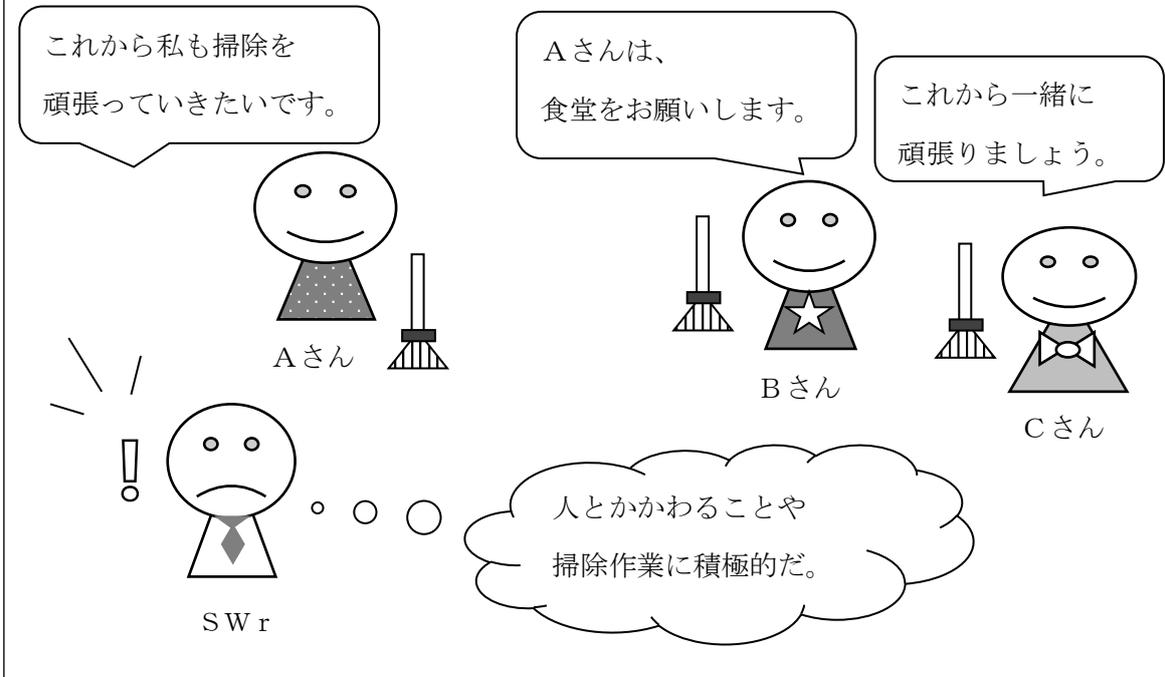


チェックリスト〈SWrの技法〉

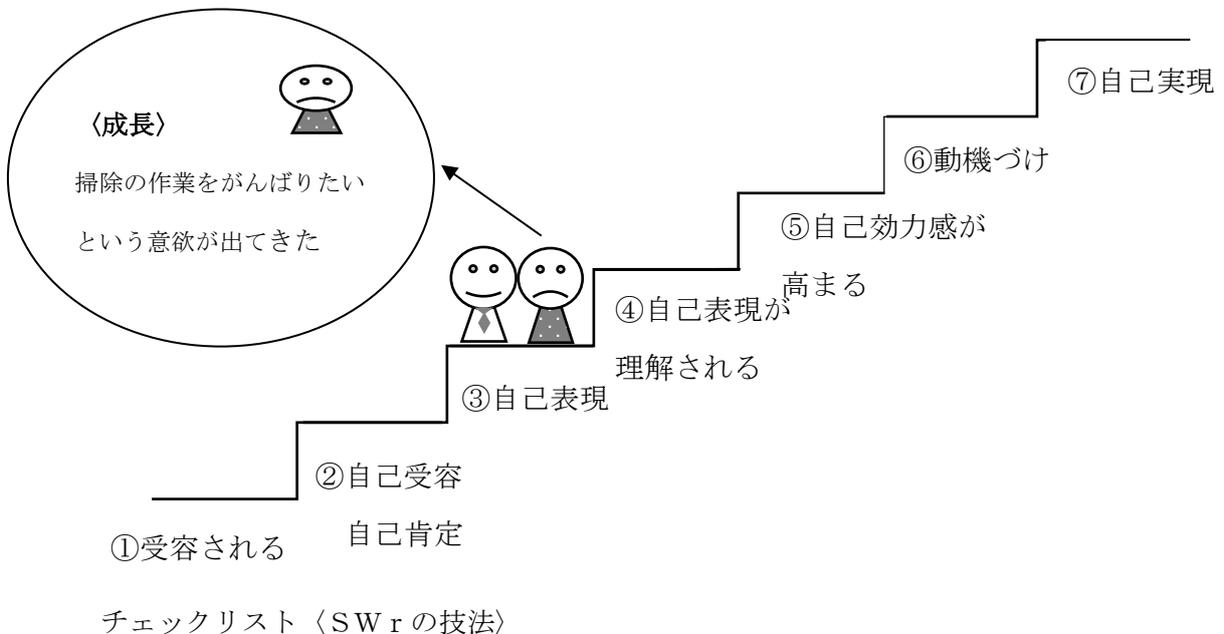
- . 利用児者をありのまま受け入れる
- . ストレングスの活用
- . ストレングスの分析
- . 社会資源の活用

【場面3】③自己表現

Aさんは、清掃の作業に参加するか少し迷っていたが、BさんやCさんと一緒なら頑張ってみようという気持ちになり、作業に参加することを決めた。



【場面3の考察】

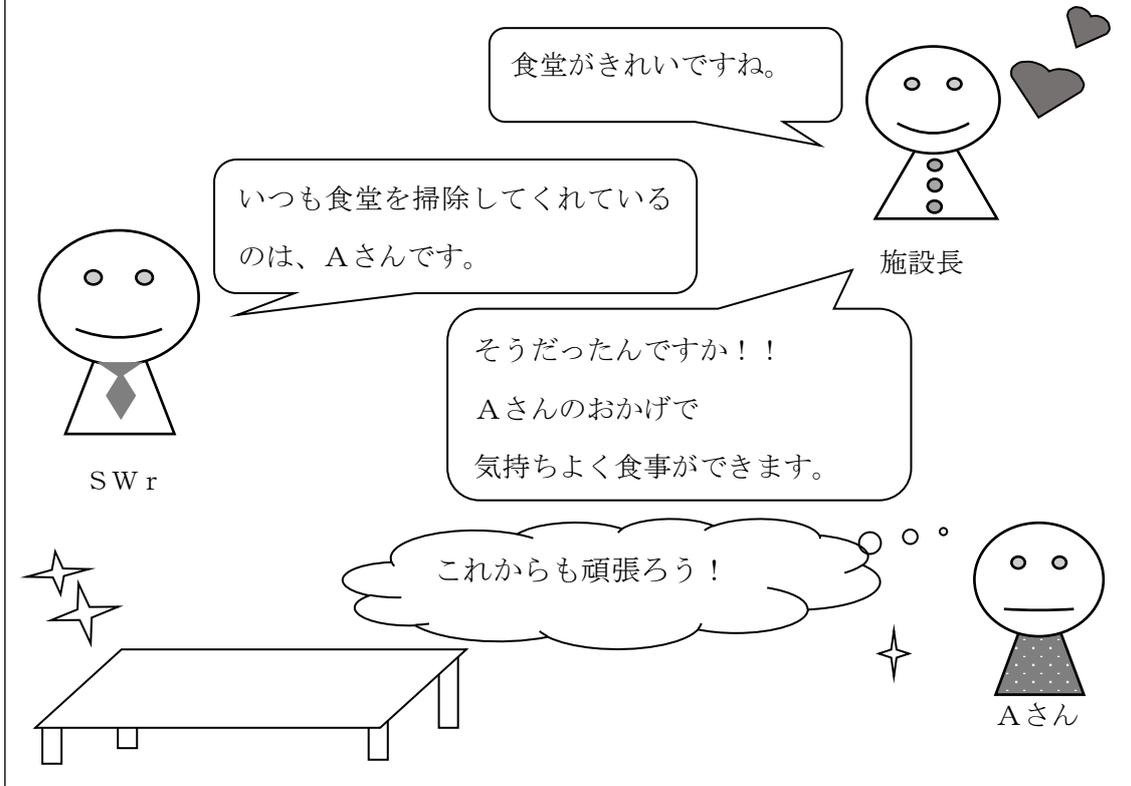


チェックリスト〈SWrの技法〉

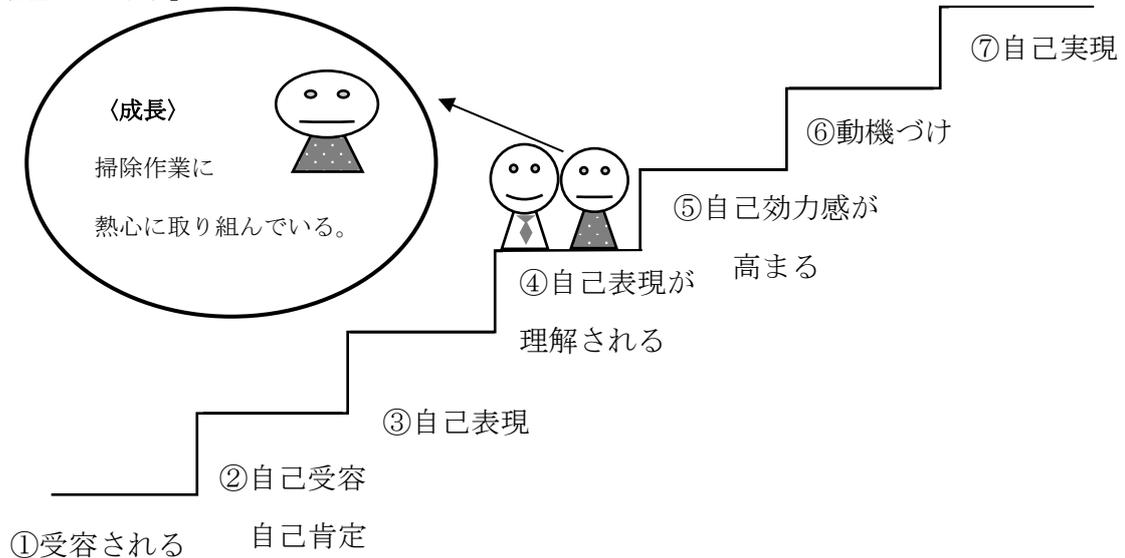
- | | |
|--|---|
| <input type="checkbox"/> . 利用児者をありのまま受け入れる | <input checked="" type="checkbox"/> . ストレングスの活用 |
| <input type="checkbox"/> . ストレングスの分析 | <input checked="" type="checkbox"/> . 社会資源の活用 |

【場面4】④利用者の自己表現が理解される

Aさんが掃除を頑張っていたことを施設長が気づき、Aさんの頑張りが認められた。



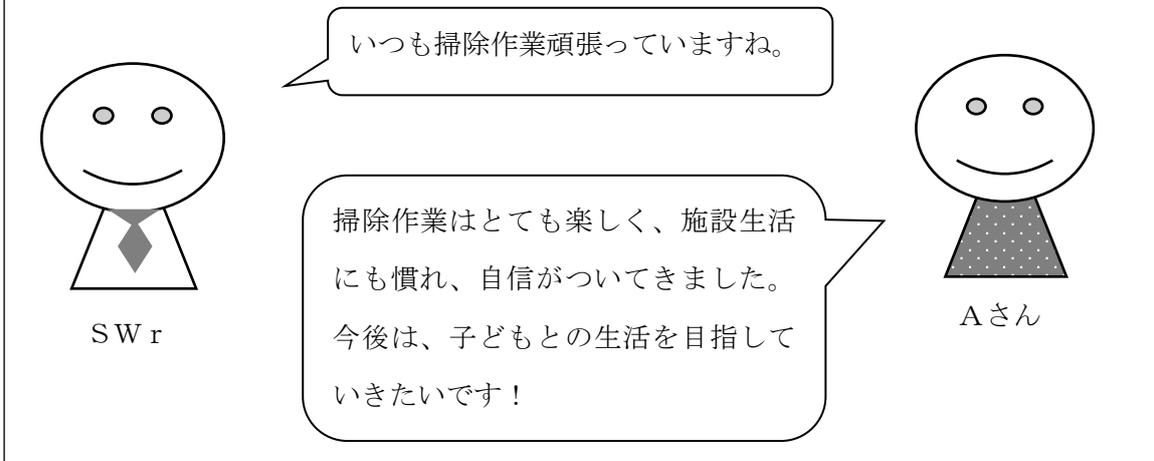
【場面4の考察】



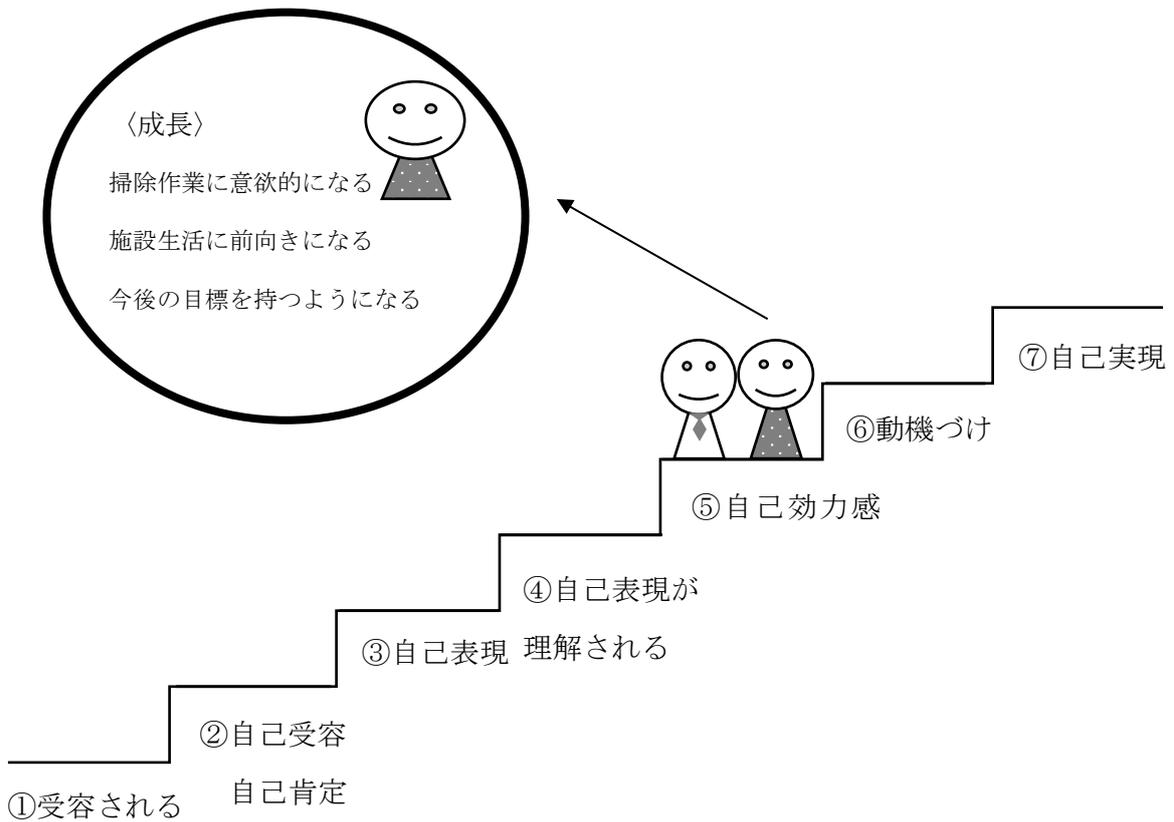
チェックリスト〈SWrの技法〉

- | | |
|---|--------------------------------------|
| <input checked="" type="checkbox"/> . 利用児者をありのまま受け入れる | <input type="checkbox"/> . ストレングスの活用 |
| <input checked="" type="checkbox"/> . ストレングスの分析 | <input type="checkbox"/> . 社会資源の活用 |

【場面5】⑤自己効力感の高まり



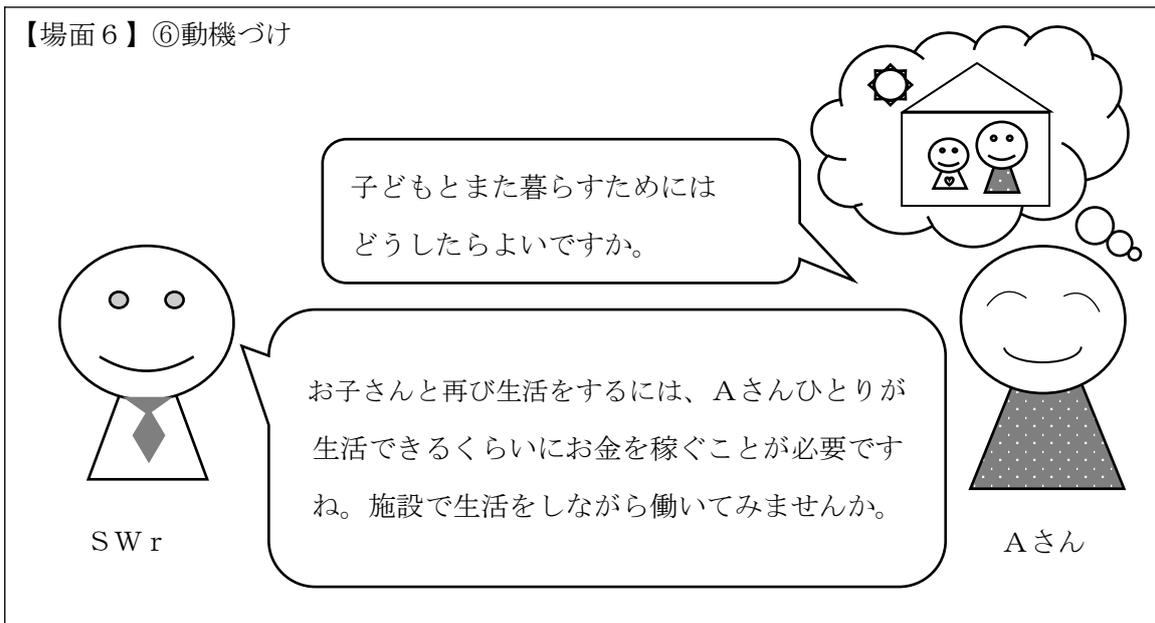
【場面5の考察】



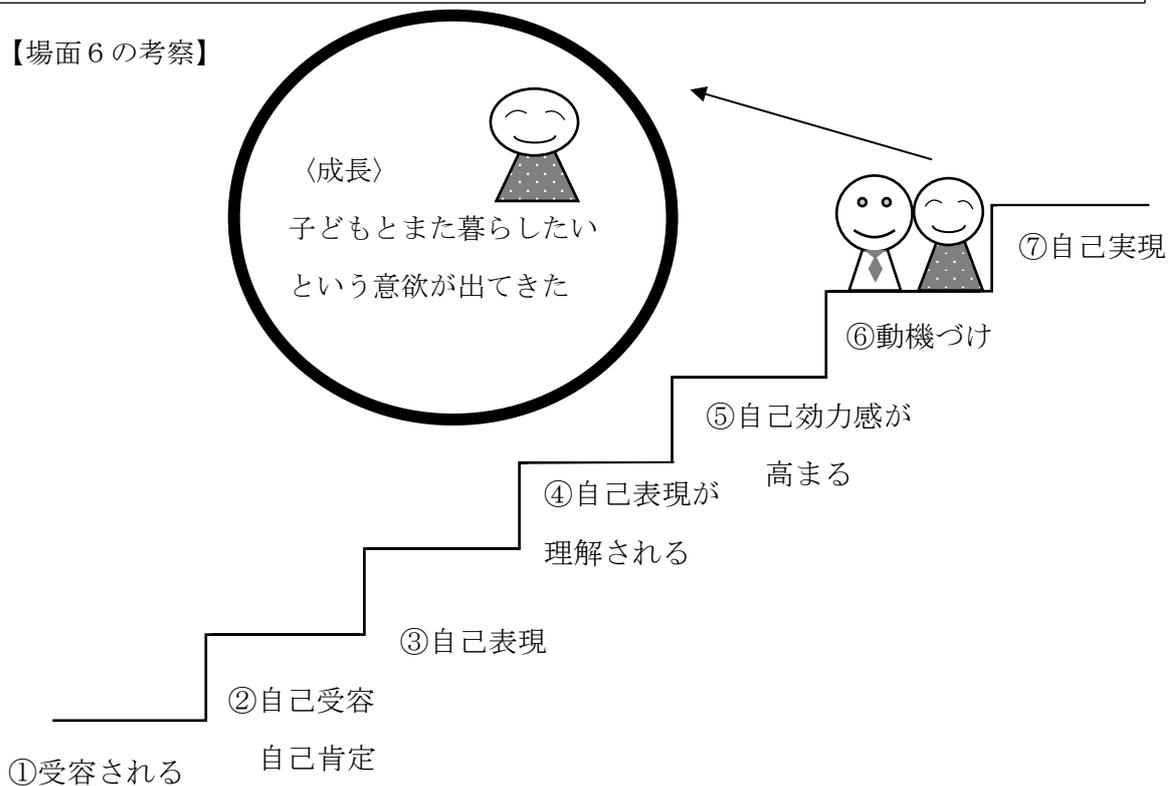
チェックリスト 〈SWrの技法〉

- | | |
|---|--------------------------------------|
| <input type="checkbox"/> . 利用児者をありのまま受け入れる | <input type="checkbox"/> . ストレングスの活用 |
| <input checked="" type="checkbox"/> . ストレングスの分析 | <input type="checkbox"/> . 社会資源の活用 |

【場面6】⑥動機づけ



【場面6の考察】

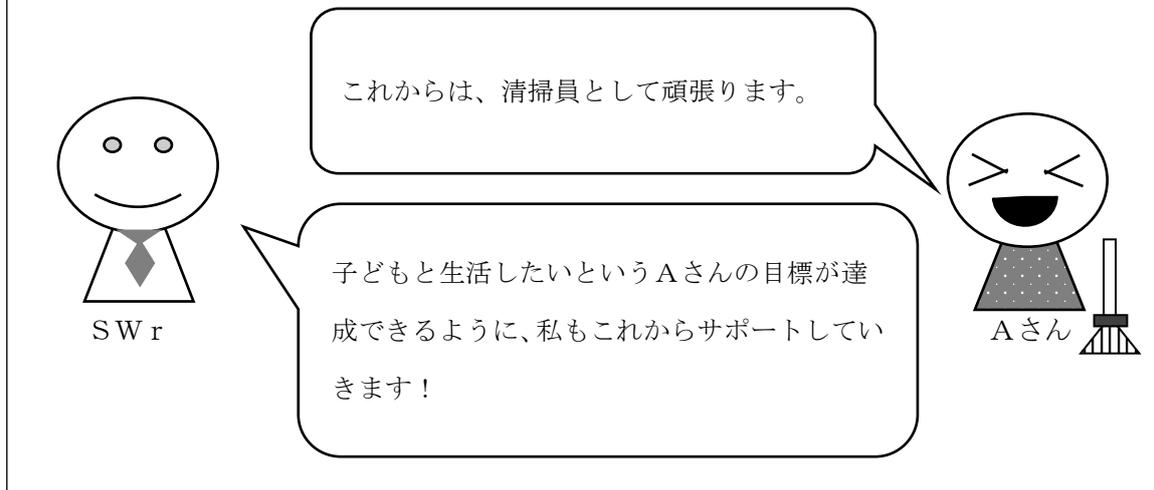


チェックリスト〈SWrの技法〉

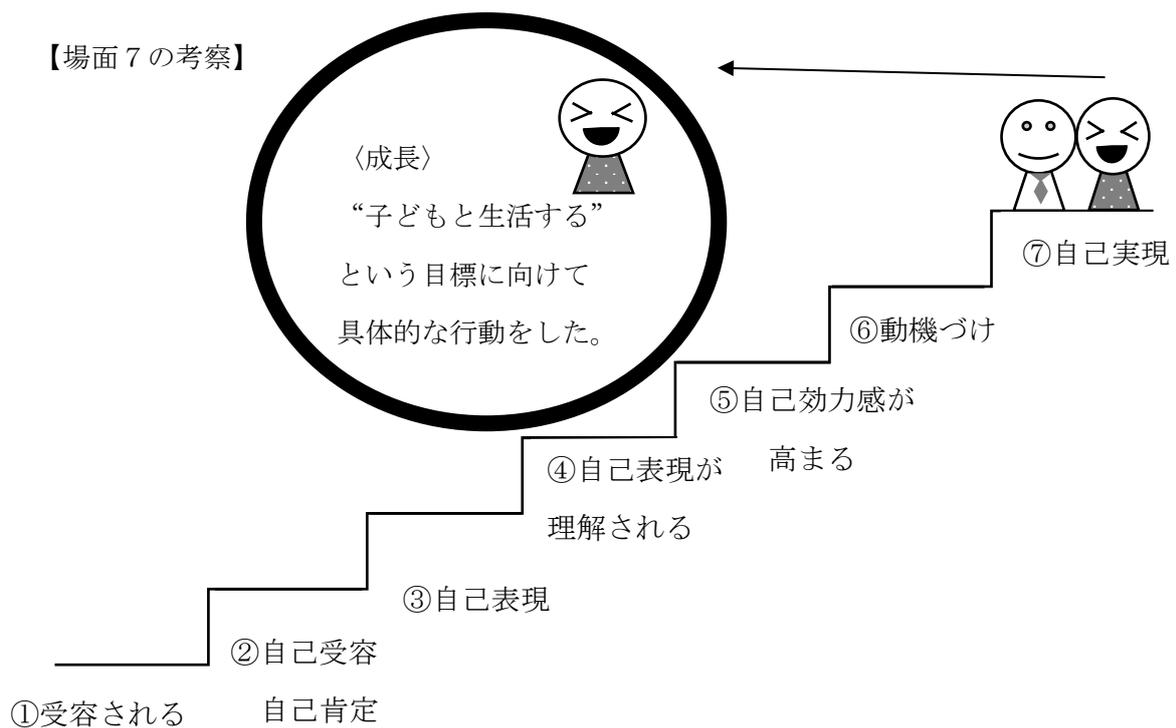
- . 利用児者をありのまま受け入れる
- . ストレングスの活用
- . ストレングスの分析
- . 社会資源の活用

【場面7】⑦自己実現

施設で生活しながらお金を貯めることを決めたAさんは、SWrに紹介された高齢者施設を見学した。Aさんは、そこでおよそ1か月半実習を行い、その後施設長との面接を経て、働くことが決まった。



【場面7の考察】

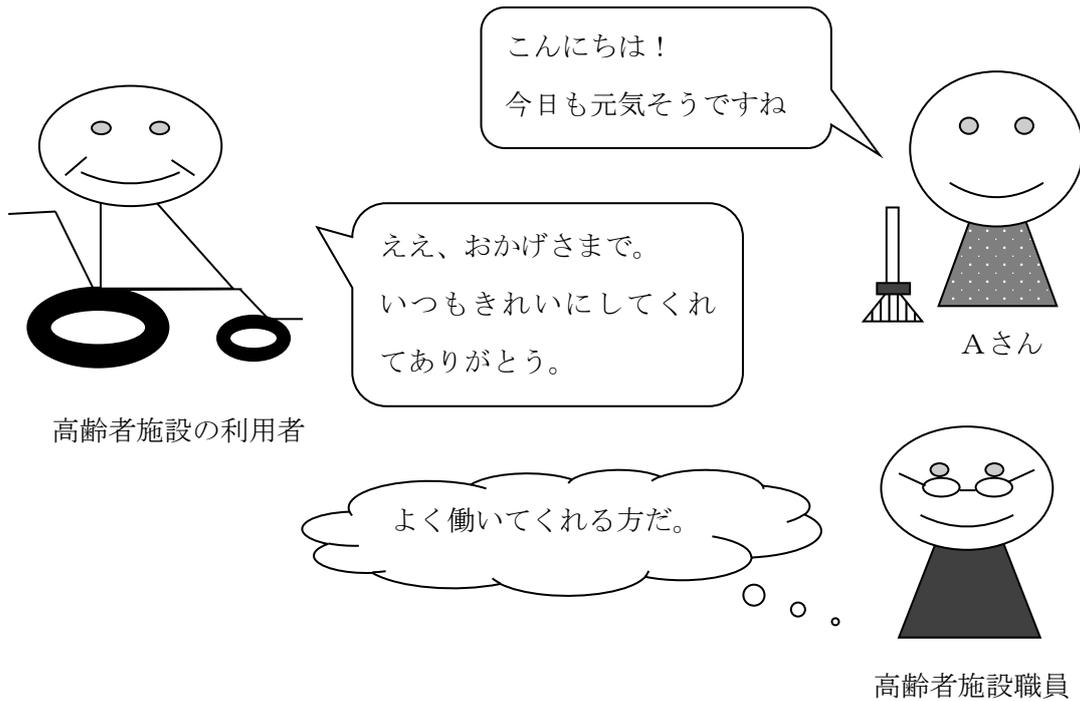


チェックリスト〈SWrの技法〉

- | | |
|--|---|
| <input type="checkbox"/> . 利用児者をありのまま受け入れる | <input type="checkbox"/> . ストレングスの活用 |
| <input type="checkbox"/> . ストレングスの分析 | <input checked="" type="checkbox"/> . 社会資源の活用 |

【Aさんの今後】

Aさんは施設で生活しながら、高齢者施設で働いている。高齢者施設でAさんは利用者や職員と良好な関係を築いており、仕事にやりがいを感じている。そして、今後、施設退所後に向けてSW rと一緒に服薬の自己管理やアパート探しなどを行い、子どもとの生活を目指していくことになった。



6. 総合的な考察

私たちは、利用児者の成長にむけたエンパワメントプロセスについて研究をするために、ソーシャルワーカーの技術を活用し、事例を進めてきた。そこで私たちは本研究を通し、エンパワメントプロセスは利用児者とソーシャルワーカーと一緒に展開していくことで、利用児者の成長につながると考えた。

なぜならば、エンパワメントプロセスでは、利用児者が支援の中心となるべき主役であり、その人が持つ生活や生活課題、そしてストレングスへの認識をソーシャルワーカーと利用児者がともに確認することが必要だとわかったからである。

そのため、エンパワメントプロセスに必要なソーシャルワーカーの視点を私たちに4つにまとめた。1つ目は、利用児者を最もよく知るのは利用児者自身ということにソーシャルワーカーが認識し、利用児者の主体性を尊重する視点。2つ目は、利用児者の強みに焦点を当て、活用していくストレングス視点。3つ目は、利用児者だけではなく、その周りの環境にも働きかけ、個人と環境の両方を調整する視点。4つ目は、利用児者とソーシャルワーカーが、利用児者の今後の生活について一緒に考え、支援を進めていく協働の視点。このような4つの視点をソーシャルワーカーが大切にすることで、エンパワメントプロセスが展開していき、利用児者の成長へとつながるのだと考えた。また、ソーシャルワーカーが4つの視点を持ちながら自己覚知を繰り返していくことで、ソーシャルワーカー自身も成長していくと気づいた。

そして、私たちは本研究を通して、その4つの視点は利用児者とソーシャルワーカーが関わるすべての場面で重要視する必要があると学ぶことができた。

そのため今後は、本研究の中で気づいたこと、学んだことを活かし、利用児者とともに成長していけるソーシャルワーカーになりたい。

7. おわりに

本日は、お忙しい中私たちの発表を最後まで聴いてくださり、ありがとうございました。私たちのグループは、メンバーが決まったその日からやる気に満ち溢れ、何度も話し合いを重ねてきました。しかし、教員との面談や中間報告で、自分たちの研究したいことをうまく伝えることができず、悔しい思いをしました。最後の中間報告後、教員との面談を行い“時間がないからあなたたちの研究はここまでよ”と言われた気になりました。そこから、私たちの負けず嫌いという性格もあり、“せっかくここまでやってきたからこそもっと自分たちの力を出し切りたい”と思い、レジュメ提出一週間前に仮事例を大きく変更しました。メンバー内でも教員とも本気で戦い、今まで以上に頑張った一週間のおかげで自分たちが一番納得できる研究をすることができました。

何度も苦しい思いをしました。最後までやり切れたのは、自分の意見を伝え、本音で話し合えるこのメンバーだったからです。また、実習を引き受けてくださった実習先施設の利用児者の皆様、職員の皆様、最後までご指導してくださった実習担当教員のおかげです。そして、この一年間ともに助け合った 19 人の友人たち、たくさんアドバイスをくださった頼りになる先輩方、毎日帰りが遅くなる私たちのために温かくておいしいご飯を作ってくれてくれた家族に心から感謝しています。最後に、準備を手伝ってくれた後輩たちのおかげで実習報告会を迎えることができました。これまで支えてくださったすべての方々に感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました。

8. 引用・参考文献

<引用文献>

- ・西梅幸治『ソーシャルワークにおけるエンパワーメント実践展開研究の意義』福祉社会研究第4・5号 p.59、61 2004年

<参考文献>

- ・植戸貴子『エンパワメントの概念整理とエンパワメント実践のための具体的指針に関する一考察』社会福祉士第10号、社会福祉法人日本社会福祉士会、2003年、p.61～p.66
- ・植戸貴子『エンパワメント志向の社会福祉実践～利用者－ワーカー関係のあり方についての一考察』社会福祉士第9号、社会福祉法人日本社会福祉士会、2002年、p.62～p.63